

世界の難民情報を伝える

UNHCR NEWS

United Nations High Commissioner for Refugees

Number

5

MARCH 1998



Contents

Special Report

ルワンダへ帰った難民の
子どもたちへの援助活動
1997年報告

ルワンダへ帰ってきたティビビ

Update

世界各地の難民状況

Campaign Report/Information

国際ソロプチミストアメリカ 始まりはインドシナ難民への支援

関東ゴルフ連盟 「関東オープンゴルフ選手権競技」

(株)富士メガネ 眼鏡をたずさえて難民キャンプへ

真如苑 難民の子どもたちに教育を

お便りから

新刊紹介 世界難民白書1997/98



UNHCR

国連難民高等弁務官日本・韓国 地域事務所

ルワンダへ帰った 難民の子どもたちへの援助活動

1997年報告

1996年11月中旬以降、約130万人の難民が自国ルワンダへ帰還したが、その途中で多くの子どもたちが家族とはぐれてしまった。94年の大量殺りく以来3年間に、家族を亡くしたり離れ離れになったルワンダの子どもは推定40万人にものぼる。その多くが家族と再会できたり遠い親戚に引き取られたりしたが、いまだに一時滞在所や施設で生活している子どもも多い。

緊急事態において、自分を守る術を何も持っていない難民の子どもたちを保護し支援することは、UNHCRの最優先課題となった。日本の支援者などから多大な寄付を受けて97年行なったUNHCRの活動の一部を紹介する。

1. 家族とはぐれた 子どもたちへの支援

家族との再会に向けて

96年11月以来ルワンダへ帰る途中で親や肉親とはぐれてしまった子どもたちは、登録されているだけで2万5601人。

UNHCRは他の機関と協力して24時間以内に半数以上の子どもを家族と再会させることができた。自分の家族についての子どもたちの記憶が鮮明なうちにすぐに家族と再会させることはとても重要だ。そのためには、まず保護者とはぐれた子どもを探し出し、子どもについての情報を書き出し、中央データベースに入れる。それから、ルワンダ国内や近隣諸国で家族を追跡調査する。

家族と再会できるまで、子どもはまず、一時滞在施設で保護される。これらの施設では、地元のお母さんたちが交代で始終子どもたちの面倒をみている。そのため病気の流行や死亡事故はまったくなかった。故郷が判明した子どもたちは、数日後

に故郷の一時滞在施設へ移され、そこで家族の捜索が行なわれる。

家族と再会できない子どもたち

現在約2割の子どもたちが家族とまだ再会できないでいる。そのほとんどは、まだ幼いため、あるいは恐ろしい経験のショックで心に深い傷を負ったために自分の家族や故郷について、はっきり説明できない子どもたちだ。

UNHCRは他の援助機関とともに、子どもたちが一日でも早く家族と再会できるよう努力を重ねている。子どもの写真アルバムを作って広範囲に回覧して知り合いを探したり、子どもを探す親が子どもの滞在施設を訪問するための交通手段や宿泊施設提供を支援している。また、子どもから情報を聞き出す担当者のインタビュー技術向上のトレーニングも行なっている。

同時に、一時滞在施設の修復や、子どもたちの心身のケアが行き届くように、そこで働く職員を対象にした、子どもの健康や栄養、発育、心理な

どについてのトレーニングも行なっている。また、おもちゃなど何もない施設にいる子どもたちが、創造力を発揮しながら廃棄物を利用して遊べるようなプログラムを始めた。

里親探しとその家庭への支援

家族が見つからない子どもたちには、里親となる家庭を探すか、子どもたちが長期間暮らせるところを探さなければならない。UNHCRは里親となる家庭を登録すると同時に、コミュニティ全体がこのような子どもたちを支援できるよう奨励している。そして、子どもが家族と再会できるか、里親となる家族が見つかった後も、問題がないか確認している。

里親となって子どもを育てている家へは、家庭用品セットを配った。さらに、種と農具を渡すなど、里親家庭が安定した収入を得られるような支援も行なっている。

2. 栄養と保健

UNHCRはルワンダに帰ってきた難

民、特に子どもたちの栄養状態の回復に力を入れてきた。自国に帰ってきた難民がまず入る一時収容センターで、栄養状態のチェックを行ない、栄養失調の子どもは直ちに栄養専門センターへ送られる。重度の栄養失調の子どもには、24時間体制の対応を行なう。満員の栄養センターでは、栄養士が適切な食べ物を与えた。

世界食糧計画(WFP)から配給される食糧を補う形で、UNHCRは高カロリービスケットや治療用ミルクを配給した。補助食が在庫切れにならないように注意をはらい、また子どもが適量のカロリーとビタミンを摂取しているかどうかのモニターも続けた。一時収容施設では、ビタミン欠乏症に陥らないよう、必要に応じて野菜や果物を配っている。

また、栄養失調の子どもの治療や感染症の予防接種、ビタミンAの補給などの保健サービスも、すべての一時収容センターで行なわれた。

3. 教育

ルワンダに帰った数多くの難民の子どもたちが将来、平和な国を造りあげていくためには、教育が重要な鍵となる。なるべく早く子どもたちが教育を受けられるよう、紛争で壊された小・中学校を早急に修復・再

UNHCR/M.YONEKAWA



建する必要があった。

そこでUNHCRは、特に多くの難民が帰った地域を中心に、小学校については29の教室を建て、7校を修復・増築した。また、中学校8校を新設した。同時に、心に傷を負った子どもたちに対応できるように、教師を対象にトレーニングを行なった。

この支援で、毎年約7000人の子どもたちが教育を受ける機会を与えられた。また、トイレや寮、運動場などの修復や建設も行なった。

4. 難民の子どもたちを守るためのUNHCRの基本方針

緊急事態で避難所や食べ物、水、基礎保健・衛生サービスなどを与えられなければ、一番先に犠牲となって死んでいくのは、難民の子どもたちだ。このためUNHCRにとって、難民の子どもたちの保護・支援は最優先課題だ。特に、保護者とはぐれた子どもたちを見つけ出して保護すること、そして、なるべく施設には入れず、直ちに肉親や保護者を探し出す努力を開始すべきだ、というのがUNHCRの方針である。

また、子どもたちは日々成長・発達するため、特別なニーズがある。難民の子どもたちは、生命の危険など自分の身に起こった出来事の直接の

影響に加え、教育などの機会を奪われたという間接的な影響も大きく受けている。その子どもたちが健全に成長・発達できるようにするためには、年齢に応じた対応をしなければならない。基礎保健や栄養、教育などに加え、心に受けた様々な障害を乗り越えて生きていくための支援も必要だ。

しかし、UNHCRは難民の子どもたちだけを対象とした特別な活動を行なう訳ではない。なぜなら、子どもは家族やコミュニティの中で育てられるのが一番自然だからだ。また逆に、子どもの福利を最も左右するのは、保護者(たいていの場合は母親)が置かれている状況や健康状態である。そこでUNHCRは難民の家庭、特に難民の女性が置かれている状況を改善し、活動への参加を促す支援を行ない、これによって難民の子どもたちの福利向上をめざしている。

また、難民の子どもたちを単なる被援助者としてとらえるのではなく、独自の権利を持ち、自分の生命に関わる決定に参加するための独自の意見や提案、能力を持った人間であるという認識も大切である。難民の子どもたちも、コミュニティの一員であり、難民の保護や支援活動に大きく寄与する潜在的可能性を持っている。UNHCRはそれを活かすよう最大限の努力を払う必要があるとしている。

UNHCR/M.YONEKAWA



ルワンダに帰ってきた ティビビ

UNHCRルワンダ事務所 米川正子

私がルワンダの北東部にある町ニャガタレに赴任したのは、1995年6月。当初、難民帰還を促進するため、家族再会の活動に積極的に取り組んだ。

この活動は、次のような手順で始まる。たとえばルワンダ国外にいる18歳未満の子どもが、難民キャンプ内のUNHCR事務所に「ルワンダの親元に帰りたい」という希望を出す。するとルワンダのUNHCR事務所に「親が親戚がいるかを調べ、子どもを引き受けられるかどうか確認してほしい」という電文を送る。

そこで、UNHCRルワンダ事務所が親を捜し、子どもとの再会を望んでいると分かれば、それを先のUNHCR事務所に伝え、子どもをルワンダに帰還させる準備に取りかかる。また反対に、国内に留まっている親から、「国外にいる子どもを帰してもらいたい」という要請が出される場合もある。

忘れられないエピソード

UNHCRタンザニア事務所とさまざまな調整をした結果、ある日、4歳から14歳までの子ども6人(3家族)と一緒にニャガタレ近郊に帰還することになった。UNHCRタンザニアが難民キャンプからタンザニア・ルワンダ国境へ子どもを送り、国境から家までは我々UNHCRルワンダ事務所が面倒を見るという手はずだ。

子どもたちに国境で会うと、マラリアにかかっている一人を除いて、皆元気だ。無事に家に着き、親と会えるだろうかという不安と、自分の国に一年半ぶりに帰れたという喜びが入り混じった表情が顔に表れている。その中でも、年少の子どもを面倒を見ていた、聡明でしっかりした9歳の女の子、ティビビが印象的だった。

子どもたちは我々の車に乗り、家に帰る途中の道で、外の景色を見ながら声を上げる。といっても、普通

の子どもが口にする内容ではない。「あっ、この丘で虐殺が起きたのを見たんだ」この道を雨の中を夢中で走ったっけ。殺されないように逃げ回って、どこに向かっているのかもわからなかったわ」子どもながら、何という経験をしたんだろう。家から国境までの約150Kmの道のりを4週間かかって歩いたと、ティビビが教えてくれた。恵まれた暮らしになれた、日本人の子どもたちに果たして同じ事ができるのだろうか。

ムハンジ湖が見えてきた時、ティビビが叫んだ。「今はあんなに青くてきれいだけれど、前見た時は死体が一杯で真っ赤に染まっていたわ」。美しい姿の湖しか知らない私と運転手は、それを聞いてぞくとした。罪のない子どもたちは、何と恐ろしいものを見たのか。そしてティビビが「私の目の前で母親が殺され、そして、ツチ族である父親も殺されるのではないかと恐かった」と語った時、もはや私は心が痛みすぎて、何も言えない状態であった。

ティビビの家に近づいた頃、彼女は「私が通っていた学校だわ」と建物を懐かしそうに見ていた。そう、彼女はきっと友だちが大勢いて、学校も好きだったのだろう。それなのに大人が起こした虐殺のために、彼女をはじめ多くの子どもたちが学校を断念しなければならなかったのだ。家に着き、ティビビと二人の弟は「よく無事に帰ってきたね」と父親や近所の人たちに暖かく迎えられた。嬉しそうな父親に頭をなでられ、ティビビたちはさっそく近所の子どもたちと遊び始めた。

心の傷と豊かな人間味
一週間後にティビビの家へ同僚と遊びに行った。子どもたちは3人とも私に抱きつき、父親も「子どもが帰ってきて今でも信じられない気持ちだ。

本当にありがとう」と礼を言いながらソーダをごちそうしてくれた。「ただし」と父親は続けて言う。「ティビビは母親が殺されたところを目撃したこともあって、私に『ずっと生きていく力はあるの?』と聞いてきた。答えに困ってしまった」。かわいい笑顔をみせているが、彼女が相当トラウマ(心の傷)を受けたことがわかる。

庭で話していると、雨が降り出し、家の中に入った。ルワンダでは、客が来た時、雨が降るといいことがあると言われ、私たちをいいお客さんとして再び歓迎してくれた。そして父親は「自分にはビジネスがあるけれど、生活は苦しい。子どものために援助してもらえのなら何でも欲しい」と言う。しかし、別れる際に私たちに、庭でとれたアボガドを何個か持たせてくれた。もちろんUNHCRへの感謝の気持ちがあつてのことだろうが、父親は子どもたちを養うので精一杯のはずだ。それにもかかわらず、おみやげまでもらって、私は感激のあまり涙が止まらなかった。自分が貧しくても、他人には気持ちをこめてもてなしをする、という習慣はアフリカではよく見られる。彼らの人間味にはいつも感動してしまう。

現在は他の活動に追われ、この家族を訪れることはないが、また近々会いたいと思う。子どもたち、特にティビビは元気に成長しているだろうか。トラウマに負けず、自分の道をしっかり歩んでいることを心から願う。

写真提供：米川正子



ルワンダに帰ってきた子どもたち。中央が米川正子さん

Update

世界各地の 難民状況

詳細はインターネットの
ホームページ(英語版)をご覧ください

<http://www.unhcr.or.jp>

カンボジア状況

タイにふたたび難民流入

カンボジアでおきた1997年7月の政変によってラナリット第1首相が追放された後、6万2000人をこえるカンボジア難民がタイに逃れた。98年1月22日現在、タイ国内スリン県のフエイ・チェルンキャンプに1万5986人、トラート県のチョン・カオ・ブルとバン・マムアンの2つのキャンプにそれぞれ3万3996人と1万1990人が収容されている。

12月末と1月初めには、トラート県のキャンプのすぐ近くで武力衝突が起こった。そのため、タイ当局は国境から離れたより安全な場所に難民を移動させるため、候補地を検討している。

援助プログラム

UNHCRはこれまでにキャンプで毛布とマラリア予防のための蚊帳のほか、食糧(米、油、缶詰、豆)や燃料を配給した。さらに地雷の犠牲者6人が病院に収容され、治療を受けている。トラート県のキャンプでは数名がマラリアや肺炎で死亡したため、難民の健康状態のモニタリングが強化された。

キャンプはタイ赤十字が管理し、世界食糧計画(WFP)が食糧を提供。さらにアメリカ難民委員会(ARC)と国際救援委員会(IRC)も、保健、給水、衛生事業に協力している。UNHCRは今年6月までの緊急援助資金として600万ドル(約7億5000万円)を要請するアピールを発表した。

カンボジアへの帰還と総選挙

10月10日以降、UNHCRの13回にわたる集団帰還計画のもと、3434人が陸路カンボジアに帰還した。WFPは、

帰還民への40日分の食糧提供に合意した。帰還民の多い村では、UNHCRによる即効プロジェクト(給水施設などの修復)や収入確保プロジェクトが実施される予定。UNHCRはさらに、合計124名の庇護希望者をバンコクから飛行機で帰還させた。

国際社会は、今年7月26日に総選挙を実施するというカンボジア政府の発表を歓迎している。だが、多数の国民が難民として国外に逃れている状況下での選挙実施については、懸念の声も聞かれる。

最近の東南アジア訪問において緒方高等弁務官は、国民が安全に帰還できるよう、停戦協定を締結すべきだと強調した。これがカンボジア問題解決のカギとなるという点で、UNHCRと各国政府の見解は一致している。(1998年1月28日現在)

アフリカ大湖地域の状況

緒方貞子 国連難民高等弁務官は、2月5日から3週間にわたり、アフリカ9か国(ジンバブエ、タンザニア、ブルンジ、ルワンダ、ケニア、ウガンダ、コンゴ民主共和国、コンゴ共和国、エチオピア)を訪問した。UNHCRによる難民・避難民援助が続く大湖地域を視察するとともに、各国首脳およびサリム・サリムOAU(アフリカ統一機構)事務局長と会談。

UNHCRは3月2日、大湖地域の5か国にいる難民・帰還民の保護と支援のための緊急アピール(総額1億5900万ドル)を発表した。高等弁務官は最近のこの地域の訪問の際、地域社会再建における女性の役割を強調したが、このアピールの中でも440万ドルは、家族を支えていかなければならない女性の援助に割り当てられている。(1998年1月29日現在)

各国の状況

ブルンジ

1月6日、ブジュンブラ県のマラムビヤ村が襲撃され、住民8000人が逃げ出した。緒方高等弁務官は翌日の声明で、「UNHCRがブルンジで支援する帰還民約17万人、および国外にいるブルンジ難民20万人への影響が

懸念される。今回の事件は帰還民の安全を脅かすとともに、帰還をはばむものだ」と暴力の激化を非難した。1月28日、和平工作の中心人物であったシンゾイエバ国防大臣がヘリコプターの墜落事故で死亡した。

ルワンダ

ルワンダ北西部で抗争が激化したため、UNHCRはコンゴ(旧ザイル)難民1万5000人以上をルワンダ国境の町ギセニから国境からさらに離れたビュンバに移動させた。移動は軍の護衛のもと、12月22日にはじまり年末に完了した。1月22日、UNHCRはギセニの病院に収容されていた164人のコンゴ難民を飛行機でビュンバに移送した。UNHCRはさらに保護者のいない子どもたち185人をギセニの収容センターから移送する予定である。

タンザニア

UNHCRはタンザニアにいるコンゴ難民の自発的帰還を迅速にすすめるため、タンガニーカ湖北西部のパラカ港を修復した。港には1月16日、パラカ出身者を中心とする帰還民800人を乗せた最初のフェリーが到着した。これまでに、1万5000人がコンゴ民主共和国に帰還したが、タンザニアには依然として6万人程度が残る。UNHCRは、タンザニア警察に輸送・通信機器を提供し、治安確保の協力を得る予定。

コンゴ民主共和国 (旧ザイル、首都キンシャサ)

UNHCRは、コンゴ共和国からコンゴ民主共和国に逃れてキンシャサ近郊のキンコレ・キャンプにとどまっている難民の帰還を12月19日に開始。帰還が終了すれば、ピーク時に1万人を収容していたこのキャンプは閉鎖される予定である。ブラザビルに着いた帰還民には必要に応じて1か月分の食糧、毛布、建材、調理器具などが支給される。

コンゴ共和国(首都ブラザビル)

コンゴ共和国には依然として、ルワンダ難民1万1204人がいる。UNHCRは昨年、1423人を帰還させたが、今年はまだ誰も帰還を希望していない。

Campaign Report/Information

国際ソロプチミストアメリカ 始まりはインドシナ 難民への支援

国際ソロプチミストアメリカ日本の各リジョンは、約20年前のインドシナ難民の危機を契機にUNHCRの活動に継続的な資金協力を行なってきた。そして、アフリカでの緊急援助をはじめ世界各地での活動、さらに「キャンプ・サダコ」プログラムなどへと支援対象を広げてきた。これまでに総額で1億円以上がUNHCRに寄せられた。

97年には会報で「特集：難民救済 - 今、私たちにできること」を組み、5つのリジョンや各クラブでの難民支援活動を紹介。自国に戻ったルワンダ難民の女性たちの自立プログラムへの支援に取り組んでいる。



女性の自立プログラムのひとつであるレンガ作り。女性たちの手で粘土に水が混ぜられ、焼上げられていく。

関東ゴルフ連盟 「関東オープンゴルフ 選手権競技」

関東ゴルフ連盟(KGA)は1992年以来毎年、ゴルフを通じて国際貢献に寄与しようと、チャリティートーナメントを主催している。寄付の総額は、昨年までに計8000万円にのぼる。

97年9月4～7日、「関東オープンゴルフ選手権競技」が、茨城県ゴルフ場協会および水戸グリーンカントリークラブの協力で開催された。会場に設置された募金箱には参加選手やギ

ャラリーからの暖かい支援がよせられた。全加盟倶楽部にも募金箱を置き、寄付を呼びかけた。ルワンダの女性支援のために約1110万円がUNHCRに贈呈された。

関東ゴルフ連盟の「ホールインワンしたらチャリティしよう」の寄付呼びかけにご協力くださった新井安寿さんから同連盟に送られたお手紙をご紹介します。

「(略)さて、小生またまだ「ホールインワン」を達成しました。(略)前回のあいさつ状に『次回は世界も平和になり、難民問題も解決していることでしょうか』と記しましたが佐藤君(連盟事務局長)によれば、“とんでもない。今でも2700万人の難民が食うや食わずの生活を強いられているのです。暮れの忙しい時にゴルフに興じられる幸せを感じその一部を難民に分けてあげられたし”とのこと。ごもともなことで素直に従った次第です。」

(株)富士メガネ 眼鏡をたずさえて 難民キャンプへ

富士メガネ社長の金井昭雄さんが、500組の眼鏡を携えて初めて難民キャンプを訪れたのは1983年。以来14年間にわたり、タイ(インドシナ難民)、ネパール(ブータン難民)、アルメニア(国内避難民)で活動を続けてきた。

難民キャンプでは、まず一人ひとりに簡単な視力検査を行なって、持参した眼鏡の中から合うものを選び出す。また、現地でこのようなサービスが継続できるように、現地スタッフを教育・訓練する。必要な検査器材も提供してきた。

これまでにUNHCRを通じて、寄贈された眼鏡は約6万組(その他の寄贈品を含めると約81万ドル相当)。日本

からこの活動に参加し、キャンプで一緒に汗を流した同社のスタッフは延べ75人にのぼるといふ。

15年目を迎えた今、「これからも力の続く限り期待にこたえていきたい」と金井さんは語っている。



真如苑 難民の子どもたちに 教育を

UNHCRが援助している難民のうち、半数以上は18歳未満の子どもたち。こうした子どもたちの将来にとって欠かせない教育のためにと、真如苑から1210万円が寄せられた。

この寄付は、アフガニスタンでは、親をなくした子どもたちの基礎教育やバミヤン州での冬季学校プロジェクトなどに、旧ユーゴスラビアでは、青少年を対象としたコンピュータ・通信技術訓練や教育プロジェクトにあてられる。



セルビアとモンテネグロで、難民センターや個人の住居にすんでいる難民の子どもたちのために、地元コミュニティが率先して行なっている教育プロジェクト。この子どもたちが勉強するために必要な黒板や教科書、紙や鉛筆、石板などの購入に支援があてられた。

お便りから

ルワンダのみなさまこんにちは。今、仙台では「光のページェント」というイベントがあります。このイベントでは、仙台の町のなみ木に、たくさんの電球をつけます。そして、夜になると数え切れないほどの電球

でいっぱいになり、仙台の町をかがやかせます。このイベントは何度見ても「きれいだな」と、思わせます。

私たち、仙台白百合学園小学校では、今年も「歳末助け合い」という運動をおこないました。たくさんの品物とお金があつまりました。

みなさまにお届けするお金はその

中の一部です。このお金がみなさまのお役にたてばうれしいです。もうすぐクリスマスです。よいクリスマスをむかえられるようお祈りしております。では、みなさまさようなら。

(1997年12月)

仙台白百合学園小学校 児童会代表
前山博子

新刊紹介 世界難民白書 1997/98 人道行動の課題

本書では、UNHCRの保護と援助の対象であるさまざまな人々 - 難民、帰還民、庇護希望者、国内避難民、無国籍者 - に焦点をあて、「強いられた移動」という問題を、最新の事例から検討する。また、このような人々の保護を強化するための方法を提案し、広範な「行動への課題」を提示している。



読売新聞社刊
UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)編
2700円+税

問い合わせ先：
読売新聞社出版局販売部
Tel : 03-5245-7041

読む資料・見る資料

さしあげます

季刊誌

「難民 Refugees」—— 難民問題の現状と保護・援助のあり方をめぐる情報誌。特集には難民保護と国際社会の対応、人道援助活動をめぐる将来の展望など、各層の視点を紹介します。

パンフレット

1 難民女性とは—— 難民の8割をしめるのは女性と子ども。暴力の犠牲となりやすい女性たちの実態を取り上げます。
2「リーフレット」—— UNHCRの活動や難民問題の解決方法などを、イラスト入りで簡単に紹介しています。

「わたしたちの難民問題」—— 大学生などUNHCRの若いボランティアが中心となって高校生向けにつくった入門書。（「僕たちの難民問題」改訂版）

「難民問題の手引き」—— 「難民問題の現状」「地域別にみる難民問題」「UNHCRの活動」などを教師向けにまとめました。サイズ変形A5版

「難民の子どもたち」—— どうして難民になったのか、逃げる途中でどのような経験をしたのか、キャンプではどんな生活を送っているか、そして将来の夢など、子どもたちの声が聞こえてきます。小学生から高校生向け（20頁）

1. **ポスター 2種類**—— 世界の難民の子どもが描いた絵画から、アフガン難民（12歳）とスーダン難民（17歳）の作品2点を選んでポスターにしました。サイズA2（42×59cm）

2. **ポスターセット**—— 難民地図、UNHCRや難民などについての説明と写真で構成したセット。10枚一組。サイズA2（42×59cm）

UNHCR 早わかり

UNHCR 早わかり（最新版1997年11月発行）
UNHCRの概要

ニュースレター

UNHCR News（現在の難民の状況とUNHCRの援助活動）

募金箱

難民援助の募金にご協力ください。
ボール紙製 8.5×18×13cm
プラスチック製 8.5×18×13cm
プラスチック製は折りたたみ不可
詳しくはお問い合わせください。

お貸しします

展示用パネル—— 文字、写真パネル、世界難民地図を合わせ20枚が一組です。（68×47cm）貸し出し希望期間、使用目的、主催者をお知らせください。（ご要望が多いため、2か月前にはお申し込み下さい。）

ビデオテープ

1（日本語吹替え版・字幕版）
ほんのちょっと変えてみよう（14分）
2（日本語吹替え版）
世界の難民はどこに'95（19分） 難民女性（13分）
3（日本・韓国 地域事務所制作）
難民もみんなも同じ地球人（19分）中学生向き

お知らせ

UNHCR日本・韓国 地域事務所はホームページを開設しています。ぜひご利用ください。

<http://www.unhcr.or.jp>

お問い合わせ先

UNHCR日本・韓国 地域事務所
広報室

〒107-0052 東京都港区赤坂 8-4-14
TEL03-3475-4882
FAX03-3475-4884

資料や募金箱は、基本的に無料です。ただし送料と、資料枚数の多い場合はコピー代がかかります。広報室宛に、ご質問も含めて官製はがきでお申し込みください。できる限り着払い（宅急便または郵便小包）をお願いいたしますが、ご無理な場合、送料分の切手を、資料受け取り後、同封の受領証と共に広報室宛てにご返送ください。

UNHCRニュース NO.5

1998年3月

発行

UNHCR日本・韓国 地域事務所
広報室

郵便振替

口座番号：00130-4-59734

加入者名：UNHCR